

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年七月二十八日(土曜日)午後五時開演

演目解説 石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織

狂言 伯母ヶ酒(おばがさけ)

吝嗇りんしやくな酒屋を伯母に持つ酒好きな甥が主役です。御機嫌伺いに出向いても、伯母には一度も酒を振る舞われたことがありません。今日も周到に作戦を練って、一つ飲ませてもらいたいと迫りますが、売り初めが済まないのを理由がんに頑がんと拒否きひされます。帰りがけに、近頃人を食う鬼が出ると言い置いた甥ふうりゆうは、風流ふうりゆうの面を掛けて鬼に変身、酒屋に戻って伯母を脅迫し、念願の酒にありつけました。しかし酔って静かになり、正体を見破られます。

能 殺生石(せっししょうせき)

玄翁道人げんのうどうじん(ワキ)が奥州を出て都へ上る旅の途中、下野しもつけは那須野の原に着きますと、里の女(前シテ)が現れて石のほとりに近づかぬよう忠告します。それは昔鳥羽院の上童に玉藻の前という人の執心こころが凝り固まった殺生石でした。荒涼とした秋の夕暮れの原野で、女は石のいわれを語ります。王法おうほうを傾かたけようと帝の近くに侍り、才色兼備を寵愛けいあいされた化生の美女けしやうは、ある夜の御遊ぎよゆうに光を発して玉体を悩ませ、やがて調伏ちようふくされて那須野に消えました。その跡が大石となり往来の人に今も害をなすのだといい、女は石魂を名乗り、再び本体を現すことを約束して石中に隠れます(中入)。玄翁が仏事をなし石魂の成仏を祈りますと、石が二つに割れ光が差して、恐ろしい狐鬼(後シテ)が現れ、玉藻の前の正体を語ります。その昔、安倍の泰成に調伏された時のことや、那須野で三浦の介すけ・上総かずさの介に狩り責められた様を懺悔ざんげに再現して、石魂は自ら悪事を断つことを誓って失せます。

(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(里女)

鬘まげをつけ、鬘帯をしめ、万媚又は泣増の面をかける。

後シテ(野千の精)

赤頭をつけ、小飛出の面をかける。

終了予定 午後六時四十五分頃